

灯火法語

白骨の御文章（蓮如上人）

それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おおよそはかなきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。

されば、いまだ萬歳の人身を受けたりということを開かず。一生過ぎやすし。いまにいたりてたれか百年の形体をたもつべきや。我や先、人や先、今日ともしらず、明日とも知しらず、おくれさきだつ人は、もとのしずく、すゑの露よりもしげしと言えり。

されば、朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなはちふたつの眼たちまちに閉じ、ひとつの息ながくたえぬれば、紅顔むなしく変じて、桃李のよそほいを失ひぬるときは、六親眷属あつまりて嘆き悲しめども、さらにその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の煙となし果てぬれば、ただ白骨のみぞのこれり。あはれといふも、なかなかおろかなり。

されば、人間のはかなき事は老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏をふかくたのみまゐらせて、念仏申すべきものなり。

あなかしこ、あなかしこ

●今回は、蓮如上人の御文章と呼ばれるお手紙の中から「白骨章」を紹介します。長文ですが、全文を掲載しました。照明寺では葬儀のときなどに、この白骨章を拝読しています。

蓮如上人は室町時代に活躍した浄土真宗の僧侶です。浄土真宗の開祖である親鸞聖人から数えて八代目の宗主にあたります。誕生された当時は閑散として参る人も少なかった本願寺を一代のあいだに、多くの人々が教えを求めて押し寄せる、大きな教団へと育てあげたのです。その蓮如上人が浄土真宗の教えを広く正確に伝えていく手段とされたのが「御文章」です。親鸞聖人の残された教えを「千の物を百に、百の物を十に、十の物を一に」選りすぐり表現して下さったといわれています。

その生涯で書き残された御文章の数は二百通をこえます。

そもそも、この時代は情報伝達の手段が乏しく、文字の読めない人も多かったようです。遠方にいる門弟たちに、正確に浄土真宗の教えを伝えるには、手紙を書くしかありませんでした。御文章は門徒が集まるとき、皆の前で声に出して、浪々と読み上げられたのでした。聞き終えると、どのように受けとめたのかと互いに談合し、文字の読めない多くの民衆たちにも、その教えを正確に知らせることができたのです。

つまり「御文章」とは、浄土真宗の教えを目で読むのではなく、耳を通して聞いて味わうように作られた手紙です。ですので、まず皆さんにも一度、声に出して、言葉の響きを聞いてみてほしいのです。

● 声に出してこの白骨章を聞いてみると、言葉の響きの素晴らしさは感じるものの、所々に現代の私たちには意味が分からなかったり、また誤解しやすいところもあるように思います。

例えば冒頭の「まぼろしのごとくなるイチゴなり」は「一期（いちご）」つまり「一生・生まれて死ぬまでの期間」といった意ですが、音だけを聞けば、果物の美味しそうな「まぼろしの苺（イチゴ）」を思い浮かべる方もいるかもしれません。

また「あわれというもなかなかおろかなり」は、誤解しやすいところで、現代風に意識すると「それはもう言葉にもいいつくせない悲しみです」といった意になります。

「哀れ（かわいそう）で愚か（知恵がたりない）」と誤解してし

まえば、ずいぶん違った感じ方になってしまいます。

もし蓮如上人が現代に生きておられたら、そんな誤解を生じてしまう表現を改めなされると思いますので、私なりに現代の言葉に置き換える、意識を試みました。

原文の要となるような譬えや言葉は残しつつも、説明が多く長くなりがちですので、省略したところもあります。意味が受け取りやすいように、付け加えた部分もあります。

「無常」ということが、この「白骨章」のテーマです。常という変らないものはなく、消滅変化のなかを生き、出会い別れを重ねる私たちに、上人は何を伝えようとされたのか、共に声に出して味わってみましょう。

南無阿弥陀仏

『白骨章・現代意識』（照明寺・藤谷信人）

さて刻一刻と流れゆく人生の有り様をよくよく仏さまに問い尋ねますと、人生とはまぼろしのごとくはかなく、常に移ろい変わりゆくものとおっしゃいます。未だかつて一万年もの月日を生きたという人はなく、今の時代でも、百年の命を生きたことさえ難しきことです。我が先か人が先かも知らず、またいつ終わるとも知れない、今があります。まるで、やがて消えゆく朝露のように別れはそれぞれの形で訪れます。無常の風が来たと、たちまちに花散るようになり、ときに朝、挨拶を交わした方が、夕べには帰らぬ人となり、桃の花のような美しき姿が過去のものとなる。別れの悲しみに皆でいくら涙を流したとしても、その甲斐なく再び微笑んで下することはありません。やがて野辺におくり火葬にして夜空に流れゆく煙となってしまえば、ただ白骨が残るばかりです。ご家族の心情をなぐさめる言葉もなかなか見つからないものです。

この世の人生のはかなきことは、若き者も年老いたものも決して他人事ではありませんでした。別離の悲しみのなかではありますが、この法要を機縁として「後生の一大事」この私の命の行く末を案じ、心にかけて下さった如来の本願をより所として南無阿弥陀仏と念仏をもうし、俱に一つのお浄土でまた会わせていただきますように、と味わう念仏の日暮らしを大切に歩ませていただきますように。

あなかしこ あなかしこ



ばあばのところ

「今日は、ばあばのところで寝るね」

最近よく耳にする七歳の長女と次女の一言です。いつの間にか子は成長し、親が側にいなくても「お泊まり」できるほどになりました。本当はゆっくり、静かに眠りたいだろうに。私からすれば母である「ばあば」には、世話を押しつけるようで申し訳ないなと思いつつも、「ばあばのところ」でも安心して一夜を過ごし、眠りにつく子ども達の姿は、私にも同じような過去の良き思い出があるからか、とても嬉しいことなのです。

「ばあばのところ」は子ども達にとって安心できる場所です。また、親とは違ったことで褒めてくれたり、ときに甘

えることができたりと、子どもなりに喜びを感じるところでもあるのでしょう。

一本の廊下でつながった、「ばあばのところ」に一日に何度も行き来する娘たち姿は、私の過去の記憶、祖母の文子おばあちゃんとの懐かしい思い出を振り返らせてくれました。

私の幼き頃「祖母のところで寝る」とは、小学生の半ばから始まり中学校の半ばまで、ほとんど毎日のように続く日常の一幕でした。祖母の横に布団を並べて、明かりを暗くし眠りにつくまえ、いつもやさしく語りかけてくれました。どんな喜びも悲しみも、やさしく受けとめてくれる文子おばあちゃんが私は大好きでした。そんな祖母と一緒に寝る日々は、亡くなるその日まで続きました。

母から叱られたとき、姉たちとケンカしたとき、お菓子を食べたくなったとき、お小遣いがほしいとき、一日に何度も祖母のところに行きました。

いつもやさしい祖母でしたが、ごくたまに厳しく叱ることもありました。今でも忘れられない思い出があります。

たしか、私が友達か姉たちへの悪口を言い、人を悲しませるような汚い言葉を使っていたのだと思います。祖母は「人への悪口を言っているときの自分の顔を見てみなさい。あなたのほうがよっぽど鬼みたいな顔や心になってるよ。」祖母はいつもの「私の味方」ではなく、逆に厳しく叱りつけました。なぜだか悔しくて、祖母にまで悪口をいってしまいました。いつもやさしい祖母から叱られた、その一連の出来事は、大人となった今も、大切な思い出として胸に残っています。

過去の私と同じように、ばあばに甘える娘たちを見ながら、

「ばあばのところで過ごす、今この時間が、人生の宝物といえるような思い出になってほしいな」と願うのです。